

David Copperfield

—Byronic Hero としての Steerforth—

吉田 一穂

抄録

David Copperfield(1849-50)は、ディケンズ(1812-70)の作家経歴における初期の小説と後期の小説の分岐点にあると考えられている作品である。作品は、注意深く念入りに仕上げられた統一感のある小説であり、ヴィクトリア朝時代人としてのヒーローを描いている。ヴィクトリア朝時代人としてのヒーロー、デイヴィッドを考えるにあたり、無視できない側面がデイヴィッドの階級意識である。そして、デイヴィッドの階級意識と密接な関わりを持つ人物がステアフォースである。ステアフォースは、紳士階級でありながら、紳士階級としての安定した生活を望まず、人生の意味を自力で見出そうとして悲劇的結末を招いてしまう。本論文では、ステアフォースをデイヴィッドとの関係、彼自身の性格、エミリーの誘惑と悲劇的結末という観点から考察することにより、「バイロニック・ヒーロー」としてのステアフォースを提示した。

キーワード：バイロニック・ヒーロー、紳士階級、オックスフォード大学

David Copperfield: Steerforth as a Byronic Hero

Kazuho Yoshida

Abstract

David Copperfield (1849-50) is usually considered the dividing point in Dickens's career between the early and late novels. It is carefully crafted and unified novel, presenting its hero as a Victorian man. If we regarded David as a Victorian man, we could not disregard his class consciousness, and Steerforth is closely related to David's class consciousness. Although he is a man of gentleman class, Steerforth does not want to continue living a stable life, and, what he tries to find the meaning of life on his own, brings about his tragic end. This paper shows Steerforth as 'a Byronic Hero', by considering him from the viewpoint of his relationship to David, his own character, and his seduction of Emily and his tragic end.

Key words: A Byronic Hero, Gentleman Class, Oxford University

目次

- I. はじめに
- II. デイヴィッドとスティアフォースの出会い
- III. スティアフォースの性格
- IV. エミリーの誘惑と悲劇的結末

* 近畿大学短期大学部非常勤講師

I. はじめに

David Copperfield(1849-50)は、ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の第8番目の小説であり、ブラウン(Hablot K. Browne)のさし絵つきで1849年5月から1850年11月まで、Bradbury & Evans社により月刊で出版された。作品は、ディケンズの作家経歴の中間点で書かれ、デイヴィッド(David)の虚構の自伝において作家自身の人生から材料がとられている。ディケンズの作家経歴における初期の小説と後期の小説の分岐点にあると言える *David Copperfield*は、注意深く念入りに仕上げられた統一感のある小説であり、ヴィクトリア朝時代人としてのヒーローを描いている⁽¹⁾。ヴィクトリア朝時代人としてのヒーロー、デイヴィッドを考えるにあたり、無視できない側面がデイヴィッドの階級意識である。そして、デイヴィッドの階級意識と密接な関わりを持つ人物がスティアフォース(Steerforth)である。

スティアフォースは、紳士階級の人物であり、セイレム・ハウス(Salem House)での年長の生徒でデイヴィッドをひいきにする。デイヴィッドは、無慈悲で冷酷で野蛮な校長クリークル(Creakle)でさえ、手出しできないスティアフォースを英雄視するが、このスティアフォースは、紳士階級という枠でのみとえられない人物である。ポール・シュリック(Paul Schlicke)は、スティアフォースを「バイロンの人物」(a Byronic figure)ととらえ、アラン・グラント(Allan Grant)は、「スティアフォースは、意志の自由を満喫する。意志の自由は、バイロンの魅力の本質的要素である。」⁽³⁾と述べる。すなわち、スティアフォースは、バイロニック・ヒーロー(Byronic Hero)と言える人物であるが、デイヴィッドの精神に多大な影響を与える人物である。メル先生はスティアフォースの不興によりクビになり、スティアフォースはエミリー(Emily)を誘惑するので、彼はわがままで利己的な心を持っていると言えるのであるが、それにもかかわらず、デイヴィッドは、後にスティアフォースの死を深く悼む。スティアフォースの存在がデイヴィッドの人生に意味するものは何なのであろうか。本論文では、バイロニック・ヒーローとしてのスティアフォースの生き方と、彼のデイヴィッドへの影響について述べたい。

II. デイヴィッドとステアフォースの出会い

デイヴィッドが最初にステアフォースと出会ったのは、セイレム・ハウスにおいてであるが、この出会いにおいてステアフォースがデイヴィッドに与えた印象は、それまでのデイヴィッドの精神状態と深く関係している。それまでのデイヴィッドは、平和なデイヴィッドと母親と、ペゴティー (**Peggotty**) の家庭にマードストーン(**Murdstone**) 姉弟が介入して以来、彼らへの絶対的服従を強いられてきたのである。マードストーン姉弟はデイヴィッドを寄宿学校へ入れることを言い出し、彼の母もそれに賛成するが、それまでの間、彼を家で教育することに決める。家での勉強は、文法、歴史、地理等であり、マードストーン姉弟の監視のもと、名目上母を先生として習うのであるが、一日の課業の後、彼にとって一番嫌なことがあるのである。それは、難しすぎる算数の計算問題がマードストーンにより出されることである。無論、デイヴィッドに答えられるはずがない。そして、問題にさんざん悩まされたあげく、それから解放された時、代わりにパンをもらうが、その晩寝るまで、馬鹿にされるのである。マードストーン姉弟に拘束されたデイヴィッドは、自身を「二匹の蛇に魅入られた哀れなひなどり⁽⁴⁾」とたとえる。またデイヴィッドは、マードストーン姉弟の恐ろしい神学、すなわち、子供などというのは、小毒蛇の集まりであり、お互い毒し合うに決まっているという神学により、⁽⁵⁾ 同じ年頃の子供達と遊ぶことがほとんどなかったのである。マードストーン姉弟による教育は、デイヴィッドの精神に悪影響を及ぼす。デイヴィッドは、その悪影響について次のように語る。

The natural result of this treatment, continued, I suppose, for some six months or more, was to make me sullen, dull, and dogged. I was not made the less so by my sense of being daily more and more shut out and alienated from my mother.
(55)

つまり、彼はマードストーン姉弟により拘束され精神の自由まで奪われそうになるのである。ただ一つのなぐさめは、父親の残した本(*Roderick Random*, *Peregrine Pickle*, *Humphry Clinker*, *Tom Jones*, *The Vicar of Wakefield*, *Robinson Crusoe* など)を読むことで、その行為により、デイヴィッドはかろうじて精神のはけ口を見出すのである⁽⁶⁾。しかし、ある日難しい算数の問題をマードストーンに出され、それができないで打たれようとする時、ついに我慢できなくなって、彼はマードストーンの手にかみつくのである。

この「手にかみつく」という衝動的行為は、自分の環境を作り変えたいというデイヴィッドの願望の表れであるが、この行為のため、デイヴィッドは、セイレム・ハウスで「御用心、かみつきます」と書かれたプラカードを背中にぶら下げなければならず、彼は、大変苦しむことになる。セイレム・ハウスがデイヴィッドに与えた印象は、「高い煉瓦塀で囲まれている、陰気くさい」(76)場所であり、教室に関しては、「みすぼらしい、殺風景、得体

の知れぬいやなにおいがする」(77)教室といった印象であるが、プラカードを背中に背負っているがゆえに、デイヴィッドは、誰かがそれを読んでいるような気がして、心が休まらず、マードストーン姉弟によってもたらされたと同様の監禁状態に置かれるのである。また、校長のクリークル(Creakle)は、生徒達を鞭打つことに喜びを見出すような人間である。このような状況で唯一デイヴィッドがはげ口を求めるとすれば、それは、校長でも手出しできないステイフォースを英雄視することである。デイヴィッドは、ステイフォースとミス・クリークルと一緒に教会へ行くことに関する印象を次のように述べている。

To see Steerforth walk to church before us, arm-in-arm with Miss Creakle, was one of the great sights of my life. I didn't think Miss Creakle equal to little Em'ly in point of beauty, and I didn't love her (I didn't dare); but I thought her a young lady of extraordinary attractions, and in point of gentility not to be surpassed. When Steerforth, in white trousers, carried her parasol for her, I felt proud to know him; and believed that she could not choose but adore him with all her heart. Mr. Sharp and Mr. Mell were both notable personages in my eyes; but Steerforth was to them what the sun was to two stars. (92)

真っ白なズボンをはいたステイフォースが彼女にパラソルを差しかけてやっている光景を見て、ステイフォースが自身の友人であることを誇りに感じているので、デイヴィッドがダンディズムに憧れを感じていることは確かである⁽⁷⁾。しかし、デイヴィッドがステイフォースに感じるのはダンディズムのみではない。それは、ロマンスの英雄としてのステイフォースでもあるのである。デイヴィッドは、それまでマードストーン姉弟による教育やセイレム・ハウスによって自由を奪われてきたので、自身の刑罰（「御用心、かみつきます」と書かれたプラカードを背中にぶらさげなければならないこと）について、「とんでもない侮辱だ！」(84)と言ってくれ、自身と親しくしてくれる紳士階級のステイフォースは、デイヴィッドにとってまさに英雄と言っていい存在なのである。ステイフォースの英雄視は、デイヴィッドにロマンスの味を覚えさせ、それまで満たされなかった気持ちを満たし傷ついた心を癒すことになるのである。

注目に値することは、共同寝室で毎夜シェヘラザード(Scheherazade)のように、デイヴィッドがステイフォースを *Peregrine Pickle* と *Gil Blas* の冒険で楽しませることである。この行為は、マードストーン姉弟により拘束され、精神の自由まで奪われそうになったデイヴィッドが父親の残した本を慰めとして読む行為の延長にある行為とも言える行為である。デイヴィッドは、彼自身のうちにあった浪漫的、夢幻的な傾向が、暗闇の中であるこの物語によって、いよいよ拍車を加えられたと語っている⁽⁸⁾。デイヴィッドの語る「それらの物語類を、勝手に私の解釈で話してゆく間、それら大好きな作者達に対して、ずいぶん乱暴なこともしたと思うのだが、その辺のことは、いま私としては言うべき筋合いでもないし、

知りたくもない。が、とにかく私は、それら作者達に対して、非常に深い信仰心をいただいていた（**'I had a profound faith in them'**）わけであり、話したかぎりでは、私の知る限り、ただもう一途に話したつもりで、その点がまた、非常に効果があったように思う」（93）は、作者ディケンズの創作上の秘密を明かしていると思われる箇所であり、興味深い部分である。

ステアフォースは、物語のお礼として、算術から練習問題、その他手に合わぬ宿題類をデイヴィッドに教えているので、両者に貸借はない。またステアフォースは、物語を語る時、デイヴィッドの声がしゃがれることを気かけ、「このワインは、君が話をしてくれる時、のどが乾いたら飲むのに取っておこう」（**'the wine shall be kept to wet your whistle when you are storytelling.'**）(93)と若干の思いやりを示している。物語を話すという行為は、デイヴィッドにとって彼自身が「私の場合、別に利害を考えてそうしていたわけでもなければ、また彼がこわくてそうだったわけでもない。むしろ、心から彼を崇拜し、大好きだったからであり、報いはただ彼が喜んでくれさえすれば、満足だったのである。」と語っているように、自発的行為に近い行為なのである。デイヴィッドにとって、紳士階級であり、自身をひいきにしてくれるステアフォースは、冒険物語で楽しませるという行為と関連づけられ、ロマンティック・ヒーローとも言える存在であるが、道徳性ということを考える時、彼はデイヴィッドを裏切る存在でもあるのである。

Ⅲ. ステアフォースの性格

デイヴィッドがロマンスの甘い夢に破れるのは、まず、ステアフォースのメル先生への対応においてである。ステアフォースが計算を立てて、メル先生を軽蔑し、機会さえあれば先生を傷つけ、また他の生徒達にもそうさせるという態度に対し、デイヴィッドは心を痛める。ある日の午後、下級生達に自身に対する乱暴をけしかけていたことに対し、幸福でない人間を不当に傷つけることは、卑怯な行為だと言うメル先生に対しステアフォースは、乞食呼ばわりし、メル先生の母親が施しで養老院暮しをしていることを他の生徒達の前で言う。ステアフォースの不興の結果、メル先生はクビになるが、先生が学校を出て行った後の自身の気持ちをデイヴィッドは次のように述べる。

For myself, I felt so much self-reproach and contrition for my part in what had happened, that nothing would have enabled me to keep back my tears but the fear that Steerforth, who often looked at me, I saw, might think it unfriendly—or, I should rather say, considering our relative ages, and the feeling with which I regarded him, undutiful—if I showed the emotion which distressed me. (100)

自責の念と悔恨を感じる一方、裏切りと取られることへの恐怖を感じるデイヴィッドは、メル先生とステアフォースの間で **dilemma**(板ばさみ)に陥っているが、ステアフォース

の道徳性ということに関して、デイヴィッドはこの辺から'ambivalent'とも言える感情を持ち始めている。メル先生へのステアフォースの対応について心苦しく感じていたデイヴィッドではあるが、自身に対し気さくで明るくて、威張ったところがないステアフォースの様子に魅力を感じていることは事実であり、デイヴィッドのステアフォースの魅力に関する確信は、ヤーマスの船の家訪問において、「獅子のように勇敢」、「びっくりするほど頭がいい」、「クリケットをやらしたってあんなにうまい奴は知らない」、「すばらしく弁が立つ」、「気前のいい男らしい立派な奴」(142)と表現されるのである。ステアフォースの話をしている際、デイヴィッドはエミリーが机の上に乗りに出すようになって聞き耳を立てていることに気づく。ペゴティー氏はエミリーの様子を見、「エミリーもわしと同じできっとあの男に会いたいんだよ」(143)というが、ステアフォースとエミリーの出会いは、両者に悲劇をもたらす。

ステアフォースが初めてエミリーに会うのは、第21章においてであるが、ディケンズは、第21章に至るまでにステアフォースの生い立ちと性格について簡単に描写している。コヴェント・ガーデン(Covent Garden)座でデイヴィッドは *Julius Caesar* と新作のパントマイムを観るが、その後で偶然ステアフォースと再会する。カンタベリーにいる伯母の養子になったことと、学校を終えたばかりであると自身の近況について語り、どうしてここにいるのかと尋ねるデイヴィッドに対し、ステアフォースは、「ぼくはいわゆるオックスフォード・ボーイなんだがね。つまり、あそこでは、時々定期的に退屈でたまらなくなるんだーそれで今、母親の家に帰るところなんだ。」(287)と言う。そして、コヴェント・ガーデン座での芝居の印象について述べるデイヴィッドに対し、「君はまったくのひなぎくだよ。(you are a very Daisy)、日の出に咲いたひなぎくだって、君ほどの初々しさはないね。」「あんなくだらない芝居ってあるものじゃないよ。」(288)と言う。

ここで注目に値するのは、無垢の象徴とも言うべき'daisy'をステアフォースがデイヴィッドに対して使っていることである。趣味のよい服を無造作に着こなした容姿端麗の美青年ステアフォースにとっては、芝居などは見慣れていて、彼が見た芝居がどれほどのレベルの芝居かすぐに解り、その芝居に興奮しているデイヴィッドがおめでたい人間に映ったのである。⁽⁹⁾ 2人はハイゲート(Highgate)にあるステアフォースの家に行くことになるが、行く前、見物した「パノラマ館」や大英博物館で、ステアフォースの知識の量に圧倒されたデイヴィッドが大学で上の学位を取るか尋ねるが、それに対してステアフォースは、「ぼくは、学位なんて取るつもりもなければ、そんな方面で偉くなる気もない」と言う。さらに、名声について口にしたデイヴィッドをステアフォースは、'**You are romantic Daisy!**(291)と表現し、「頭の悪い連中に、ぼかんと口をあけて関心されたり、拍手されたりしたってそれが、君、いったい、なんだね。」(291)と言う。ステアフォースは名声には全く興味がない青年なのである。

ダンディズムとは、どのようなものかという点と衣装や立居振舞いを貴族趣味のものにしておしゃれをきめこむことになるのだろうが、それは表面上のダンディズムであって、ブ

ルジョア的な効率主義、俗物主義を批判し、孤高の美的生活を送ろうとする精神が根底にあるのである。⁽¹⁰⁾ スティアフォースにもまたそういう傾向が見られる。ジュリエット・ジョンは、ステリアフォースとデイヴィッドの関係について、「ステリアフォースは、デイヴィッドの世間に対する子供のようなメロドラマ的な考えの価値を認め、自身がそういう考えを喪失してしまっていることを嘆く」と述べる。⁽¹¹⁾ スティアフォースは、自身が持っていないヴィジョンをデイヴィッドが持っていることに羨望を感じ、逆にデイヴィッドは、ステリアフォースのダンディズムとバイロン主義（バイロニズム）に自身の子供時代になかったロマンスを見出すのである。ステリアフォースの性格は、彼の育った家庭によるところが大きいと考えられる。彼の母親は、勝気で他からの強制でなく自発的に行うという気質を伸ばすという観点から学校選びをしている。次のステリアフォースの母親の言葉が彼の性格をよく表現している。

‘He would have risen against all constraint; but he found himself the monarch of the place, and he haughtily determined to be worthy of his station. It was like himself.’ (296)

つまり、ステリアフォースは、自発的意志を妨げられることを最も嫌う人間なのである。ローザ・ダートル(Rosa Dartle)は、ステリアフォースの子供だった頃、ハンマーを投げつけられて、唇に傷痕を残すこととなったが、彼女の傷痕がステリアフォースの性格を物語っている。ローザ・ダートルの傷痕は、後に、エミリーの誘惑、駆け落ちというエゴイスティックな行為により、エミリーに心の傷痕を残すことの前触れとなっている。デイヴィッドが昔の乳母と、ペゴティー氏の一家に会いに行くことを言い、ペゴティー氏を学校で会った例の船頭ことであると説明すると、ステリアフォースは、**‘That bluff fellow!’(293)** と思い出す。会ってみれば、きっと面白いと思うと言うデイヴィッドに対し、ステリアフォースは、「君と旅行をする楽しさは、言うまでもないとして、とにかくそういう連中に会って、仲間入りするってことも、たしかに行ってみる価値がありそうだね」**(294)** と言うが、キラキラ光る目を光らせて話に注意していたローザ・ダートルが、ステリアフォースが「そういう連中」**(‘that sort of people’)** と言ったことに対して話に割って入ることに注目したい。「動物か、土塊か、それとも別種類の人間だとでもいう意味で、おっしゃったんでしょうか？ぜひ聞かせていただきたいわ」**(294)** と言うローザ・ダートルに対し、ステリアフォースは、次のように説明する。

‘Why, there’s a pretty wide separation between them and us,’ said Steerforth, with indifference. ‘They are not to be expected to be as sensitive as we are. Their delicacy is not to be shocked, or hurt very easily. They are wonderfully virtuous, I dare say. Some people contend for that, at least; and I am sure I don’t want to

contradict them. But they have not very fine natures, and they may be thankful that, like their coarse rough skins, they are not easily wounded.' (294)

スティアフォースの言葉は、彼が自身とペゴティー氏達の間には階級差を感じていて、下の階級の人間に対して偏見を持っていることを示している。このことから、ローザ・ダートルは、「そういう連中」という言葉に疑問を投げかけることにより、スティアフォースの階級意識からくる傲慢さを暴いていると言えるのである。ただ、注意すべき点は、スティアフォースが紳士階級という階級にいなながらも、名声にも安定した生活にも魅力を感じていない点である。そういう点から考えるとスティアフォースは、まさにバイロニック・ヒーローと言える人物なのである。バイロニック・ヒーローは、残酷でありながらも礼儀正しく、思いやりがありながらもサディスティックな性格であり、バイロン自身と重ね合わせて見られている。バイロニック・ヒーローは、精力的な精神、反逆的な個人主義、感情と苦悩に対する広大な能力を持つが、この無意味な世界において意味を見出そうとして必然的にエグザイルかアウトローにならざるを得ない。彼は、自己分析的で自己批評的であるがゆえに、世界と自己が見えすぎてしまい、いっそう、苦しまざるをえない。スティアフォースの場合、彼はオックスフォード・ボーイであるにもかかわらず、エミリーの誘惑、駆け落ちという経過をたどるので、ハロー校を経てケンブリッジ大学に入学したが、学業を顧みず、放埒な日々を送ったバイロンと重ね合わせて考えられる⁽¹²⁾。両者は階級に安住することもできたが、あえて反逆精神を持ち、個人主義を貫いている。スティアフォースの場合、彼の個人主義が彼の人生を誤った方向に導くことになるが、彼の悲劇の原因となったエミリー誘惑について考えてみたい。

IV. エミリーの誘惑と悲劇的結末

スティアフォースが船の家でエミリーと初めて会った時、エミリーはスティアフォースの話に熱心に聞き入っている。話の内容は、船の話、潮の話、魚の話、セイレム塾で初めてペゴティーに会った時の話、船の家や家財について自身が興味深く思っていることなどであるが、デイヴィッドはスティアフォースが恐ろしい難破船の話をしている時、エミリーの目が、自分も目の当たりに見ているかのようにスティアフォースにひきつけられていることに気づく。この箇所は、後のスティアフォースの運命を暗示しているかのような箇所である。スティアフォースのエミリー誘惑については、デイヴィッドに対するスティアフォースのハム(Ham)を表現しての言葉、「あの娘さんにとっちゃ、男の方がボーッとしていないかな、どう？」(That's rather a chuckle-headed fellow for the girl; isn't he?)(317)が彼の行動の前触れとなっている。また、彼は後に、自身が原因となる船の家崩壊について言及し、自身にもっとよく導いてくれる父親のような人間がいればよかったと述べている。次の引用は、デイヴィッドが困惑してしまうスティアフォースの変化を示している。

There was a passionate dejection in his manner that quite amazed me. He was more unlike himself than I could have supposed possible.

‘It would be better to be this poor Peggotty, or his lout of a nephew,’ he said, getting up and leaning moodily against the chimney-piece, with his face towards the fire, ‘than to be myself, twenty times richer and twenty times wiser, and be the torment to myself that I have been, in this Devil’s bark of a boat, within the last half-hour!’ (322)

ほお杖をつき、憂鬱そうに火を見入っているステリアフォースは、もう一度「もっとちゃんとした立派な父親がいれば、ほんとによかったんだろうがね！」(322)と言うが、ステリアフォースの言葉は、反逆的な個人主義を貫きながらも自身の衝動を抑制してくれる存在を彼自身が心の中で欲していることを示している。事実、父親がいれば、ステリアフォースは、紳士階級として安定した生き方を続けたかもしれない。フランク・ドノヴァン(Frank Donovan)は、デイヴィッドの父親もエミリーの父親も両者が生まれる前に亡くなっている事実は、デイヴィッドにとって2人の間のきずなとっていい事実であるが、デイヴィッドの父親が紳士であり、母親がレディである一方、エミリーの両親が、単なる漁師とその妻である点で、エミリーは2人の間の相違に気づいていると指摘する⁽¹³⁾。エミリーはとてもしレディになりたがるが、レディになることはエミリーにとって父親の命を奪い去った残酷な海から逃れて安全になることであり、彼女はもし海が漁師を傷つけたとしても金で彼らを助けることができるのである⁽¹⁴⁾。エミリーは、ハムあての手紙に「あの方が私をレディにして、連れて帰って下さるまで2度と帰って来ることはございません」(452)と書くが、2人とも父親がいない点で互いに共感を持ったとしても、ステリアフォースのエミリー誘惑は、ステリアフォース自身にとっては、階級的には決して利益にはならないのである。ステリアフォースの母親もまた、彼がエミリーの食べ物にされたと感じているのである。それではなぜ、たとえエミリーに魅力を感じたとしても、ステリアフォースは、階級的に利益にならないエミリー誘惑という行動をとったのであろうか。

バイロンのマンフレッド(Manfred)は、バイロニック・ヒーローと言える人物であるが、*Manfred* の主題の一つは、自我の意識を呪わしく感じながら、最後までこの自我のみを盾としてすべての権威に屈服しようとしなない近代人の英雄的な姿である。マンフレッドは、「知恵の樹」は「生命の樹」ではないという真理を嘆き⁽¹⁵⁾、哲学も科学も驚異の源泉も、世界の叡智も自身は自在にできるが、役にたたないことに気づく。この冒頭の部分は、ファウストの人間の知識の無力に対する嘆きを思い起こさせる部分である。自意識の悩みと自分の愛によって恋人を破滅させてしまったという罪の意識を解決するものとして、マンフレッドが精霊達に求めたものは「自己忘却」であった。マンフレッドは「自己忘却」さえ得られれば、死んでもかまわないと思っている。

精霊達は、忘却も死も与えることができないが、マンフレッドには次の引用に見られる

ように死へ向う強い衝動が見られる。

**And you, ye crags, upon whose extreme edge
I stand, and on the torrent's brink beneath
Behold the tall pines dwindled as to shrubs
In dizziness of distance; when a leap,
A stir, a motion, even a breath, would bring
My breast upon its rocky bosom's bed
To rest for ever—wherefore do I pause?⁽¹⁶⁾**

スティアフォースには、マンフレッドの場合と同じ様に自我のみを楯としてすべての権威に屈服しようとしなない英雄的な姿が見られるが、スティアフォースは階級という壁や結婚という制度に反逆しているかのような印象を与える。また、マンフレッドの場合、死へ向かう衝動が見られるのに対して、スティアフォースの場合、死に対しては、衝動というよりそれを予感しているかのようなようである。第 29 章でスティアフォースは、デイヴィッドが彼の家を訪ねた時、夜寝る前に「今後、僕達が別れてしまうなんてことがあったとしてもだよ、僕のことはね、僕の一番良かった点で憶えておいてくれたまえ」(432)と言うからである。その前にスティアフォースが言った言葉は注目に値する。スティアフォースは、「デイジー、これは君の名付け親がつけた名前じゃないけどもね。僕は、この名で君を呼ぶのが大好きなんだよーねえ、ぼくにもこうした名前つけてくれないかね、ねえ、お願いだよ」(436)と言う。この言葉は、スティアフォースが無垢の象徴である'Daisy'をデイヴィッドを揶揄するだけで使っていないことを意味する。この言葉は、スティアフォースがデイヴィッドを自身の失われた子供時代を思い出す存在と感じていることをも示しているのである。このように考えた時、スティアフォースのエゴイスティックともとれる行動の理由が理解できるのである。ジュリエット・ジョンは、スティアフォースの母親が、セイレム・ハウスのような二流のパブリックスクールや自分より下の階級の友人を選択した理由として、堂々たる英雄的な役割を演じるべく息子を育てたと述べているが⁽¹⁷⁾、スティアフォースのエミリー誘惑、駆け落ちは、スティアフォースがハムをエミリーにふさわしくない婚約者と考ただけでなく、レディになりたいエミリーの願いをかなえ、英雄的な役割を演じようとしての行動と言えるのである。時々、スティアフォースの「自分で自分を持てあますようになる」('I am heavy company for myself sometimes')(322)という言葉は、彼の自我が母親の育て方により、ますます強められたが、自身が自己分析的であるがゆえに、世界と自己が見え過ぎてしまい、彼自身が苦しんでいることを示しているのである。オックスフォード・ボーイとなったスティアフォースは、大学で上の学位を取ろうという意志もなく、学問的分野で偉くなるという気もなく、オックスフォード大学で退屈しているが、おとぎ話が記憶に浮かんできて、死へと至る悪夢(自身と無鉄砲ないたずら小僧が一緒になり

ライオンのえじきになる夢)について自身が語っていることから、空想やロマンティックなことに興味を持っているが、それを実現するとなると紳士階級の自身が危険にさらされていると無意識に感じているのである。はからずも、スティアフォースの悪夢は、第 55 章の「あらし」'Tempest'で実現してしまう。この章における難破船は、大変な迫力で描かれているが、エミリーをヨーロッパのバイロンの旅に連れて行き、海でシェリー (Shelly) のように溺死したスティアフォースは、⁽¹⁸⁾ あえて自身の限界に挑戦して死を招いたように見える。後にデイヴィッドは、長生きすれば何千人の敬愛、賞讃を集めたかもしれないスティアフォースの死を深く悼むが、紳士階級の安定した生活を維持しようとしたところだが、あえて安定した生き方に反逆し、人生の意味を自力で見出そうとしたところにスティアフォースのバイロニック・ヒーローたるゆえんがある。たとえ、エミリーの誘惑、駆け落ちというエゴイスティックなふるまいをしたとしても、スティアフォースはデイヴィッドの人生初期にロマンティックな夢を与えた存在として、彼の心の中で永遠に行き続ける人物なのである。

注

- 1 Paul Davis, *Dickens Companion* (Harmondsworth: Penguin, 1999), p.105.
- 2 Paul Schlicke, *Oxford Reader's Companion to Dickens* ed. Paul Schlicke (Oxford: Oxford University Press, 1999), p.147.
- 3 Allan Grant, *A Preface to Dickens* (London: Longman, 1984), p.112.
- 4 Charles Dickens, *David Copperfield* (New York: Oxford University Press, 1989), p.55. 以下、引用文は同書により、引用末尾の()にページを示す。
- 5 ディケンズが、ここで'though there was a child once set in the midst of the Disciples'(55)と付け加えていることは注目に値する。これは、マタイによる福音書、第 18 章 2-3 節への言及である。弟子達がイエスのもとにきて「いったい、天国ではだれがいちばん偉いのですか」と言ったのに対し、イエスは幼な子と呼ばせ、彼らのまん中に立たせて、「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう」と言うのである。このマタイによる福音書への言及により、ディケンズはロマン派の子供観と通ずる子供観を示すのである。
- 6 カーライルの父親は、厳格なカルビン主義者であったので、虚構を「虚偽、けしからぬもの」と考えて嫌い、子供に想像の生み出した文学を読むことを禁じた。その結果、子供の内面は、ますますそういった文学を求めるようになり、カーライルが学校へ行くようになり、下宿するようになると、その家の貸し出し文庫から、スモレット (Smollett)、デフォー (Defoe)、フィールディング (Fielding)などを読むことになった。ディケンズの自伝的部分としてデイヴィッドもまた、父親の残した本、スモレット、

デフォー、フィールディングなどを読むので両作家の読書に関する自伝的部分は似ていると言える。両作家の読んだ本は、精神の監禁状態を打ち破ると共に、両作家の作家としての基礎を作ったと考えられる。[拙稿『衣服哲学』—トイフェルスドレックと自助の精神— (*HARMONY*第10号、pp.113-4.)] ジョン・スチュアート・ミル(*John Stuart Mill*)は、*Autobiography*(1873)において、自身への父親の教育について述べている。それによると、ミルの父親は、娯楽書類を稀にしかゆるさなかったが、そういった本を排斥することは、彼の方針の一部だったというわけではない。そういった類の本を父親は、息子のため借りたからである。ミルは、*Arabian Nights*、カゾット (*Cazotte*) の *Arabian Tales*、*Don Quixote*、エッジワース女史の *Popular Tales* などを記憶している。自身が持っていた本の中でミルは特に *Robinson Crusoe* を最も楽しんだようである。[*John Stuart Mill, Autobiography* (Harmondsworth: Penguin, 1989), p.30.] ミルが8~12歳に父親の元で勉強した数学に関しては、マードストーンがデイヴィッドにした教育とデイヴィッドの心理と共通する部分が見られる。なぜなら、ミルは、「私は難しい問題を解き得なくて、たえず父の不興をまねいたが、それを解くのに、必要な予備知識を私が持っていないことには、父は気づかなかったのである。」(*Autobiography*, p.32.) と述べているからである。

- 7 摂政時代のダンディの代表がブランメル(*George Bryan Brummell, 1778-1840*)で、彼はロンドンの社交界で一世を風靡した。彼は貴族の秘書をしていた一介の平民の長男として生を享けたが、イートンからオックスフォードという貴族的な教育課程を進んだ。彼は在学中から非の打ちどころのない端正な身だしなみと立ち居振る舞い、当意即妙な会話の術で頭角を現した。[松島正一、『イギリス・ロマン主義事典』(北星堂書店、1995), p.356.]
- 8 マルコム・アンドリュース(*Malcolm Andrews*)は、物語の語り手としてのデイヴィッドの技能が、彼の職業作家としての卓越性の前兆になっている点を指摘している。[*Malcolm Andrews, Dickens and the Grown-Up Child* (Iowa: University of Iowa Press, 1994), p. 154.] このことは、ディケンズが自身が読んだ作品の作家達に強く影響を受け、作家として作品を書く際にもその影響が現れていることを思い起こさせるので、自伝的部分と言えるのである。
- 9 ジュリエット・ジョンは、「ステイアフォースは、19世紀の演劇公演に対し、子供のような熱狂に陥ることもできず、子供のような考えを持つこともできない。彼の作品に対する軽蔑は、演劇の事情通の軽蔑である。」と述べる。[*Juliet John, Dickens's Villains: Melodrama, Characters, Popular Culture* (Oxford: Oxford University Press, 2001), p.178.]
- 10 小林章夫『イギリス王室物語』(講談社、2001), pp.41-2.
- 11 *Juliet John, op. cit., p.180.*
- 12 バイロンは、第5代バイロン男爵の死によって第6代バイロン卿となっている。(1798)

『岩波西洋人名辞典増補版』(p.997.)]

- 13 Frank Donovan, *Dickens and Youth* (New York: Dodd, Mead & Company, 1968), p.31.

以下は、デイヴィッドに対してエミリーが自分達の相違について言った言葉である。

'Besides,'...,'your father was a gentleman and your mother is a lady; and my father was a fisherman and my mother was a fisherman's daughter, and uncle Dan is a fisherman.' (34-5)

- 14 Frank Donovan, *op. cit.*, p.31.

- 15 「知恵の樹」は「生命の樹」でないとは、創世記第3章への言及である。アダムとイブがその実を食べた禁断の木がすなわち「知恵の樹」であるが、エデンの園には、このほかに「生命の樹」があつて、神は、「知恵の樹」の実によって善悪を知った人間が、さらに「生命の樹」の実をも取って食い、かぎりなく生きるようになることを恐れ、アダムとイブを楽園から追放したのである。

- 16 *Lord Byron: Selected Poems* ed. Susan J. Wolfson and Peter J. Manning (Harmondsworth: Penguin Books, 1996), p.472.

- 17 Juliet John, *op. cit.*, p.176.

- 18 1822年7月シェリーの乗ったヨットは、嵐のため沈没し、彼の遺体は、10日後、海岸に打ち上げられた。